

森本 茂著

『伊勢物語全釈』

中 田 武 司

一

伊勢物語及び源氏物語を精力的に研究され不断的の努力を展開されてゐる森本茂氏が、ここに大著『伊勢物語全釈』を上梓された。先年公刊された『伊勢物語論』に続いての快挙である。

氏の研究方法は一言双句で表現できる程度に浅薄なものではないが、いうならば、物語文学の抒情史を広く把握し、文芸性を追求するという態度である。そしてこの態度は、源氏物語の抒情素材が伊勢物語にある、という態度で常に考究されているように見受けられるのである。

伊勢物語の研究史は、今日、目に触れる丈でも中古期にはじまったと認めうるから、想像以上に長い訳だが、その歴史の長い割には物語文学の抒情的研究は久しく見られなかったといえる。抒情性の研究は、その物語の含む時代的諸相や生活の背景とも大きく影響しあふこと必定である。この様相は単にその物語の抒情性を生成・改変させるにとどまらず、時には物語自体を逆に改変させることにもなるのである。伊勢物語の伝本や、源氏物語の原初体の真偽に断を下し得ない今日の学界の状態をみても、その問題

の複雑性は知ることができる。ところが、こうした数多くある問題を一つ一つ丹念に解きほぐし、その時代的背景は勿論のこと、文献学的にも多くの問題を含む個所を明確に論述し、伊勢物語の真髓に迫まろうとしているのが、ここで紹介しようとする森本氏の『伊勢物語全釈』なのである。

二

『伊勢物語全釈』という著名が示すように、伊勢物語全般にわたって詳細に注解がなされている。汗牛充棟の俚諺よろしく伊勢物語注釈書の多い中で、伊勢物語拾穂抄(季吟)や勢語臆断(契沖)の研究を俊駕する著作といつても決して過言ではあるまい。

この点著者自身も可成の自信をもって世に問う、といった態度は、著者としては消極的なものであるが、同輩の輩としては本著のここそこで、教導されるのであるから、実に頼もしい。しかし、森本氏の態度は多にして驕ることがない。それは著者自身が古注釈を熟読し、不可解な点は自己の足で歩き、实地踏査の上で実証し、論証した内容がこれを明示している。だから、中には先人を、あるいは古注を重んじ、新説を否むという方法のあるのは当然であろう。従つて全釈が研究であること言を俟たないが、各章段における語釈一つ一つが実に緻密に論述展開されている。

いかなる論文といえども読者なくては無意味な空論である。しかるにこの『伊勢物語全釈』の語釈は、それ自身が実によく纏められており、無理のない重厚な論考でいて、しかも、近世の注釈

研究が要点的に紹介してあり読みやすい文章だから、いわば、伊勢物語注釈の大成ともいえる内容となっている。

三

この『伊勢物語全釈』は大きく分けて、伊勢物語「解説編」と「評釈編」の二部から構成されている。以下順を追って紹介すると、第一編は、〔一〕歌物語 〔二〕書名 〔三〕作者 〔四〕成立 〔五〕内容 〔六〕伝本 〔七〕在原業平 〔八〕在原業平年譜 〔九〕参考文献等の九項からなっている。この第一編は著者の立場からすると、序説的に纏められたものであろうから、その内容も評釈編と比べると頁数も少ないのは止むを得ないであろう。しかしそれぞれに妥当な考証がなされている。ただ欲をいうならば〔六〕の伝本中に現存本の中で最古の姿をみせる「建仁二年奥書書本〔寂身本〕」の出現について触れられていないのは、枚数の関係からとは思われるにしても惜しまれる点である。〔一〕の歌物語という中では歌物語というジャンルを単に従来の把握としてではなく、先書『伊勢物語論』で詳述された手筆でとらえ、「伊勢物語の歌物語性」として考究するといった鋭い見方が展開されている。それ故前著と関係理解の上で本編を読むと、一層理解の度が拡がる内容である。次に評釈編について調べてみる。

四

まず評釈編は底本を天福本系統の学智院大学蔵本（旧三条西家

本）におき、各章段が、「校異」「通解」「語釈」「余説」「評」という順序に論考論述されている。

「校異」は塗籠御本（伝民部卿局御筆）との異同を対校の関係であげている。本文研究という立場を強調するならば、更に他本との校異もあるいは必要となるが、この希望は、これに続く「語釈」が十分にカバーしてくれるから、かえって本著の方法の方が校異は煩わしくなくて理解し易い。次の「通解」は語釈に即しながら丁寧に通解が施してある。余意のあるところや、文意に異同を憶測させ危惧ある箇所には、括弧付で補意がなされている。例えば有名な九段の「からごろも」の歌の場合には、

「馴れしたしんだ妻が都に残っていることだから、（こうして）はるばるとやってきた旅をしみじみと思うことよ。」
の如くであり、また多くの注解をもつ同じ章段中の「文書きてつく」に関しては、

「手紙を書いてことずける。（手紙の歌は次のようである）」
の如くにしてである。これらは一見当然の余意であり補意ではあるが、この括弧内の意は文構成上からみると解釈の本文外の内容である。そうかといってこれを本文外に除くとすると、本来の目的である情趣が消滅してしまうという点から、学者の中では多く論のあるところであった。これが明晰であることは解ついても、いざとなると勇氣のいることである。ここにも森本氏の学問に対する態度が表われており、従来の通解を数歩前進させた解釈であるといえる所以である。その他、十六段の紀有常に関する性格表

現の個所として、従来問題のある「人からは心うつくしく」について、森本氏は「性質は円満で」と、解しておられる。平安時代には容姿が可愛い、の意で多く用いられた「うつくし」は、歌物語の用語として単に可愛いの意味ではなく、「心の清らかなこと」がその底流の思想だとして、「語釈」欄でこれを詳細に述べ、この結果、「通解」で前記の如くに表出されている訳である。一度伊勢物語の解釈を試みたものならば、誰しも出逢う難問が、森本全釈では見事に整理されているから、難問もたちどころに氷解するの観がある。和歌と地文との脈絡も明確でかつ詳しい。たとえば十六段の本文「かくいひやりたりければ」十「これやこの」の歌、更に「よろこびにたへで、また」十「秋やくる」の歌などの関係は、「このように歌をよんでやったところ、（有常は次の歌をよこした）十歌の解釈」更に後者は、

「有常は喜びに堪えられないで、また、（次の歌をやった）十歌の解釈」

という如くにてである。

従来の注解には、短かい地文十和歌を素材とする伊勢物語の原型を理解する時に、この肝心な追求が不十分であるものが多かった。これを森本氏も痛感しておられることであり、それが結果としてこの「通解」に詳述されたものと思われる。したがって「通解」は原文に忠実で、かつ文法的に口語訳されていることは当然ながら、歌物語の展開というニュアンスを十分醸し出す考慮がは

らわれているわけである。次は「語釈」である。

「語釈」には愚見抄（兼良）以来の旧注と勢語臆断（契沖）や伊勢物語古意（真淵）、伊勢物語新釈（高尚）などの新注を多く参照し、特に従来解釈上に異説のある個所についてはこれを詳細に論述されているからその異同の程がよく理解できる。古注の中で、森本氏が特に重視されているのは近世期の注釈書である。近世期の注釈を重視するということは反面、旧注無視ではない。所々に「知頭抄によれば」云々の表現をみる如くに、その注釈史の仍つて来たるべき古注を尊重するという森本氏の学風なのである。一般に「語釈」という仕事は一朝一夕にはできない。ましてや氏の全釈にみる内容においてをやである。旧注・新注、更には三代実録・続日本紀や池亭記の類におよぶ正史や記録を傍証としつつ、「語釈」――伊勢物語作者の意識追求――をすることによって、物語文学の源泉や享受・文芸性を展開した一編であるといっても過言ではない。だからこの中には現代の伊勢物語関係の論文も多く参照されている。更にこの「語釈」が本著を手にする読者に欣喜を与えるのは、数多く挿入されている新鮮な写真版であり図説である。写真の一枚一枚は森本氏自身が实地踏査の上で撮影された貴重な資料なのである。氏の既刊書『源氏物語の風土』（二巻）の美麗さと似て、写真と関連して語釈を理解することによって伊勢物語の理解効果は一段と冴えを見せ、森本氏の研究の幅の広さと研究の新生面を開拓して、面目躍如とするところである。とりわけ「東下り」や業平関係の問題には、関係資料を博搜してまとめら

れたといえる個所である。このような背景の中で近世期の注釈書が顔を出すと、いかにも役者が揃ったという感じで、知らず知らず古注を理解し、合わせて現代における物語語句の誤用や歪曲性が目につく仕組みとなっている。この態度筆致こそ暗黙の中に従来の訓古注釈に対する氏の警鐘なのであろう。近世期の注釈に重きをおき論述されていることは前記したが、近世期の注釈書の中で、量的にも、質的にも伊勢物語の注釈は源氏物語のそれにひけをとらない。それ丈にまた享受偏重も可成多い。しかし「語釈」欄には真面目な注釈が手順よくまとめられているのだから、森本氏の古注造詣の深さが物語られているといえる。更にまた現代人の目から伊勢物語の素材を把握する一つの方法として、民俗学的な研究方法も採り入れて合理解し、かつ文献学的な方面でも深く根をはっているのだから、安心して森本全釈に馴染んでよいと思う。

こんな中でも氏は強引に自説を出そうとはせず、多くの類型を踏まえた上で、なお「こういう手法・発想は伊勢物語に多い」という筆致である。

『伊勢物語全釈』の中で、今一層の光りを放つのは「語釈」に続く「余説」であり「評」の内容である。

「余説」は「語釈」に掲げた語句について更に説明を要する個所を補足する意味で設けられたものである。ここには詳細な用例が多く論究され、「語釈」中で異説としてのべた諸説や、関連内容が詳述されている。項目は各章段にあるが、「余説」とは名ばかりで、ここにこそ森本氏の全釈がスムーズに展開される根源が

あるのであり、本著を親しませるための潤滑油的存在の欄なのである。「評」はいわば章段の鑑賞に代わるものだが、関連する章段の批評もなされているのだから、その奥義は著者の「伊勢物語の文芸論」の一端として読むべき論考なのである。特に「余説」には著者の研究ノートともいえる貴重な意見が散見している。もしこの「余説」を本著が欠いたとするならば、本著の善さはあるいは減少したかもしれない程の重さをもっている。語るが如き一語一語は学術的にみても極めて高いレベルのものであるが、筆致は容易なものだから実によい。

以上、些かなる瑣事をもゆるがせにせず、長年周到な準備のもとに公刊された森本茂氏の『伊勢物語全釈』を評し紹介した次第であるが、「通解」から「評」に到る内容は現在の伊勢物語注釈では正に第一級の著と推して恥ない善書といえる。この著書に關しての書評としてはただ筆不足の多いことかと危惧されるが、これを補うためにはこの著が多くの研究者、勢語愛好者に読まれることを願わずにはおられない。今後この『伊勢物語全釈』は伊勢物語をはじめ中古物語文学の研究者や愛好者には必読の書となること必定と信ずる。それ丈にこの「全釈」をもととして諸説論述された高い見識と旺盛な研究心が更に発展して、森本氏の目的とされる「伊勢物語の文芸論即物語文学の文芸論」がより大成されるんことを願って欄筆する次第である。(昭和四八年七月一日刊 5判 四六九ページ・索引一八ページ 六〇〇〇円 大学堂書店)

(なかだ・たけし 専修大学教授)